

2019年度 大学院言語文化研究科附属言語文化研究所事業一覧

I. 研究部事業

①研究員による基礎研究

1. 小林 勝法 (国際学部教授)

「大学の校歌・応援歌の歌詞の計量テキスト分析による言語文化的研究」

2. 渡邊 大 (文学部准教授)

「章学誠『文史通義』『校讎通義』の成書に関する研究」

②研究員による共同研究

研究題目 「KIZUNA—言葉と文化の力—(Renewing bonds through languages.)」

代表者 日沖 敦子 (文学部専任講師)

分担者 鈴木 健司 (文学部教授)

長谷川 清 (文学部教授)

安 平鎬 (韓国・誠信女子大学校教授)

金 華 (中国・華南理工大学教授)

大島 丈志 (教育学部教授)

浜垣 誠司 (医療法人高木神経科医院理事長)

徐 滔 (中国・北京外国語大学日語学院長)

③研究員による一般共同研究

研究題目 「東アジアにおける言語文化交流に関する国際共同研究」

代表者 蔣 垂東 (文学部教授)

分 担 者 陳 茗 (中国・厦門理工学院副教授)
周 文匯 (中国・北京師範大学珠海分校兼任副教授)
宋 洙珍 (韓国・仁荷大学校兼任講師)
盧 曉晴 (中国・北京外国語大学博士課程)

研究題目 「相手言語接触場面と第三者言語接触場面における発話
の重なりについて」

代 表 者 川口 良 (文学部教授)
分 担 者 陳 新 (中国・中原工学院専任講師)

研究題目 「日中翻訳論の史的展開」
代 表 者 白井 啓介 (文学部教授)
分 担 者 王 唯斯 (言語文化研究科博士後期課程)

④紀要発行

2020年3月16日発行『言語と文化』第32号

⑤2018年度研究員による基礎研究の報告

研究題目 「宮沢賢治作品における他界観の研究」
研 究 者 鈴木 健司 (文学部教授)
※『言語と文化』第31号に掲載

⑥2018年度研究員による共同研究の報告

研究題目 「KIZUNA—言葉と文化の力—(Renewing bonds through
languages.)」
代 表 者 日沖 敦子 (文学部専任講師)

分 担 者 蔣 垂東（文学部教授）
長谷川 清（文学部教授）
ラメイ・アレック（文学部専任講師）
鷲麗美知 ゴラナ（文学部教授）
糸井 江美（文学部教授）
于 日平（中国・北京外国語大学教授）
邵 建国（中国・北京外国語大学教授）
盧 暁晴（中国・北京外国語大学博士課程）

平成30年度の共同研究は、「KIZUNA—言葉と文化の力—（Renewing bonds through languages.）」というテーマをもとに、各分野から研究された。それぞれの研究成果は次の通り。

・「江戸時代に制作された寺社縁起絵・物語絵に関する研究」

（日沖）

今年度は奈良県宇陀市にある青蓮寺の寺院調査を3回に亘って実施したほか、大雲院（京都市）の中将姫関連史料の史料調査も実施した。これらの調査報告は2018年12月に学習院女子大学で開かれた伝承文学研究会東京例会で行った。

このほか、昨年度調査した東京都台東区の念佛院に所蔵される「髮繡六字名号」について、台東区文化財講座として一般向けに講演した（2018年6月30日）。講演のあとは、参加者とともに念佛院の寺宝の熟覧を行った。この講演のもととなった調査研究については、「念佛院の髮繡六字名号—江戸時代の中将姫信仰—」（『宗教民族研究』29号、2019年）の掲載が決まっている。

- ・「日中対照表現についての国際共同研究」（言語文化研究科部局間協定
関連依頼事業）

（蔣・于・盧）

2018年度は上記の題目について、蔣・于・盧の3人で共同研究を行い、蔣は「韓国日本言語文化学会2018年度春期国際学術大会（2018年5月12日於韓国光云大学校）、「文教大学、北京外国語大学、韓国日本言語文化学会・共同開催2018年度国際学術大会」（2018年11月2日、於北京外国語大学）、「韓国日本言語文化学会2018年度秋季シンポジウム」（2018年12月12日於韓国仁川市）での口頭発表および『日本学』第47輯に発表した学術論文「日本語のス・ツの母音と中国語の舌尖前母音について」の中で研究成果の一部を発表した。于は「文教大学、北京外国語大学、韓国日本言語文化学会・共同開催2018年度国際学術大会」（2018年11月2日、於北京外国語大学）、2018年12月本学大学院言語文化研究科での特別授業にて研究成果の一部を発表した。盧も文教大学、北京外国語大学、韓国日本言語文化学会・共同開催2018年度国際学術大会」（2018年11月2日、於北京外国語大学）にて研究成果の一部を発表した。

- ・「近代東アジア地域における人の移動と交流に関する研究」

（長谷川・邵）

東アジア地域の人の移動と文化に関して、比較研究を行った。

長谷川は、中国雲南省の少数民族文化が日中間の文化交流においていかに活用されているかを検討し、その成果報告を「2018年北京外国語大学中日韓語言文化比較研究国際学術検討会」（2018年11月2日～11月3日、北京外国語大学）において「パフォーミングアーツと文化交流の実践—雲南省の少数民族文化の事例から—」という題目で行った。

邵は来日し、本学大学院言語文化研究科の授業科目「比較文化特論」

において1930年代の日中間の政治思想の交流状況に関する特別授業を行った（2019年1月16日実施）。

日中間の文化交流が多面的に行われていることに関する事例分析を踏まえ、理論的な枠組みをどのように構築していくのかについて意見交換を行い、今後の検討課題としていくこととした。

・「A Contrastive Review of Anger Metaphors in English, Spanish, Japanese and Serbian」

（鷺麗美知）

I have researched the relevant literature on anger metaphors in Japanese and English. I have also collected new data on Japanese metaphors of anger. The responses of my informants put in question some of the theories about the uniqueness of the Japanese concept of anger and the role that *hone-tatema* divide may play in the construction of this concept.

・「内なる多文化：日本の伝統音楽から始める国際交流」

（ラメイ・糸井）

10月25日、Study Abroad Preparation 授業内で邦楽体験コンサートのイベントを行った。外国語学科の必須科目であるSAP授業の目的は、海外研修プログラムに参加するに当たり重要な情報を得るものである。その中に、日本人学生はどのように日本文化を外国人に伝えるかという課題がある。邦楽体験では、1年生全員が生で尺八と琴を聴き、実際にこれらの楽器を触ったり音を出したりすることに挑戦した。その後、4限と5限で、文教大学大学生、職員及び近所のお客様を対象としたコンサートを行い、30人くらいが集まってくれた。文教大学だからできる外

国人と日本人が楽しめる日本文化を紹介した。

多くの学生と地域のお客さんに日本の伝統的な音楽を紹介できた。このイベントを通して、日本文化で国際交流ができた。

研究部より

日沖 敦子

大学院付属の研究所として、先生方や院生のために少しでもお役に立つよう努めてまいりました。蔣垂東所長、坂上葉子氏、佐々木洋子氏（言語文化研究所）らのお力添えあって、当初の計画通り、研究活動を無事に終えることができ、感謝しております。

今年度も昨年度に引き続き、共同研究のテーマは「KIZUNA—言葉と文化の力—」となりました。このテーマをもとに、各分野（日本文学、日本語教育、英語教育、中国語学、社会学など）からさまざまに研究が進められました。多文化時代にふさわしく、多角的な視点でそれぞれの研究が遂行され、今年度の紀要にも興味深い研究論文や研究ノートが数多く寄せられました。

また今年度は、韓国日本言語文化学会主催、北京外国語大学、文教大学の共催で、光云大学校（韓国ソウル市）で国際シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは、日本の言語と文化を幅広い視野と多面的な観点から比較検討することを目的とした学術フォーラムで、2013年の第1回から毎年開催されています。今年は7回目の開催となりました。シンポジウムの分科会は言語、文学、文化の3分野からなり、8会場に分かれて計54件の研究発表がありました。本学からも文学部の教員が参加し、各分科会で報告しました。前日には、会合の場を持ち、日本語・日本文化研究の動向や国際シンポジウムの運営などをめぐって活発な意見交換がなされ、親交を深めました。

このような充実した研究活動を遂行できるのも共同研究および基礎研究にご参加下さった先生方、御論文をお寄せ下さった先生方、そして、国際シンポジウムや研究会にご参加くださった皆様のご協力あってのことです。

今後も言語文化研究所へのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

II. 研修部事業

①夏期公開講座報告

(1) 英語教育夏期講座

—英語教育における文化理解の重要性—

対象：中学校・高等学校英語科教員または教員志望者。

埼玉県内在住または在勤の方。

目的：英語教育についての理解を深める。

期日：令和元年8月2日（金）

会場：文教大学越谷校舎3号館（3401R）

参加者：27名

講義・発表内容

講義①「Art as Teaching Tool in the Digital Age」

グラハム 児夢（文教大学）

This discussion will be about the use of paintings, engravings, photographs and other images in providing opportunities for description, comparison and general expression in the English language classroom. In addition, we examine how old art can assume new life in an Internet-enabled era of “buzz.” Several serious issues are addressed without losing sight of the ultimate playful nature of the

subject, concluding with a consideration of “bad art” and an exercise in reading images from the English-speaking world that were created for a public that lived nearly three centuries ago.

講義②「ただいまアメリカ留学中！

見せます！テキサス留学のすべて（わたし編）」

奈良 美帆子（University of Houston）

私が今在学（留学）中のUniversity of Houstonは、NASAで有名なテキサス州ヒューストンにある、多様性が売りの州立大学です。そこで、私は大学院生としてビジネス（流通）を学ぶ傍ら、student athleteとして、あのカール・ルイスにコーチを度々受けています。

現在進行中ではありますが、英語、アメリカの大学、陸上に関する情報を皆さんとシェアしたいと思います。

講義③「Creating a culture of collaboration in a language classroom」

浅岡 千利世（獨協大学）

In this workshop, we will discuss and explore how to work together with someone in order to become a better teacher in your own way: two people collaborate in order to allow one person to work on his or her self-development. The lecturer will start by providing the theoretical background of collaborative learning and introduce some basic concepts. You will also have plenty of opportunities to reflect on your own teaching and try various classroom techniques.

英語教育夏期講座

(2) 日本語教育夏期講座

—東アジア最新の日本語教育事情—

対象：日本語教育に携わっている方、または日本語教育に関心のある方。

埼玉県内在住または在勤の方。

目的：日本語教育についての理解を深める。

期日：令和元年8月2日（金）

会場：文教大学越谷校舎3号館（3301R）

参加者：27名

講義・発表内容

講義①「台湾の日本語教育の今—高等教育を中心に—」

荒井 智子（文教大学）

台湾の街を歩いていると、日本語で書かれた看板をあちこちで目にします。また、台湾語になった日本語（おばさん、おでん、運ちゃん…など）を耳にすることも度々あります。今や10人に一人は日本語を学んでいるというぐらい日本語熱が高い台湾です。そんな台湾では、若者たちがどのような目的で日本語学科に入り、どのように日本語を専門的に学んでいるのでしょうか。台湾の日本語教育事情を通して、日本や日本語について一緒に考えてみませんか。

講義②「〈時間性〉及び〈他動性〉にみる日本語教育」

安 平鎬（韓国・誠信女子大学校）

世界はGlobalizationが進む中で多様な国家間における人的交流も拡大しつつあります。日韓両国の優秀な人材が交流できる環境を作るためにも言語教育が重要となります。本研究においては、文法範疇的な意味としての〈時間性〉及び〈他動性〉を中心とした日韓両言語における言語表現を比較し、両言語間の共通点・相違点を探ってみます。

講義③「新時代における中国の日本語教育の動き」

金 華（中国・華南理工大学）

中国の大学日本語教育、特に日本語専攻教育としてすでに60年余りの発展が続いており、その成果も著しいものであるとも言えます。経済のグローバル化と中国の大学教育の大衆化が進む中、大学日本語専攻及び第二外国語としての日本語教育におけるシラバスの設定、人材育成とカリキュラムなどについても新たな特色あるものを求められるようになっていきます。ここでは、新時代の人材育成の需要に向けて、中国の日本語教育における現状及びその新しい動きについて検討します。

日本語教育夏期講座

(3) 中国語教育夏期講座

—中国語学習の新しい視点—

対象：中国語教育に携わっている方、又は中国語学習者。

埼玉県内在住または在勤の方。

目的：中国語教育・学習についての理解を深める。

期日：令和元年8月2日（金）

会場：文教大学越谷校舎 3号館（3501R）

参加者：24名

講義・発表内容

講義①「現代中国語の音と日本漢字音の対応関係」

館野 由香理（文教大学・兼）

新しい元号「令和」のイニシャルは、日本語では「R」ですが、中国語では「L」で表記されます。現代中国語の音と日本漢字音には少なからず対応関係があり、「L」から始まる中国語は、日本語では「ラ行（R）」に写されます。では、「R」から始まる中国語は、どのように写されるのでしょうか？本講義では、現代中国語の音と日本漢字音にはどのような対応関係があるのか考えたいと思います。

講義②「高校の中国語の授業を体験してみようⅢ

～発音クリニック～」

星野 勝樹（埼玉県立伊奈学園総合高等学校）

中国語の学習動機はそれぞれ違うかもしれませんが、多くの人に共通しているのは、中国語を話したい、ではないでしょうか。今回は、ご自身の発音、声調を見直しつつ、日常会話でよく使われる表現や、ちょっとした挨拶文などの音読をしながら、

簡単な中国語文法や、中国語、中国に関する雑談などを交えて進める予定です。基本的な内容から始めて、気がついたら中国語を聞いて理解し、中国語で答え、中国語の文を話している、そんな体験をしてもらえるといいと思います。

講義③「異文化コミュニケーションとしての翻訳と通訳

一日中翻訳における誤訳の問題点を通じて」

王 岩（城西国際大学／中国・東北大学）

翻訳と通訳という行為は、異なった言語の間だけでなく、言語の背景にある文化の間で為されています。本講義では、日中翻訳における誤訳のいくつかの問題点を取り上げ、語彙、構文、文法などの側面に加え文化の視点も入れて分析します。また、日本の街の中で実際に見られた標識における訳文の違いなど、具体的な事例を挙げて、誤訳の現象について詳細かつ平易に解説します。

中国語教育夏期講座

（４）書写書道教育夏期講座

対象：小・中学校国語（書写）、高等学校書道担当教員。

学校教育としての書写書道教育に関心のある方。

目的：書写書道教育についての理解を深め、指導技能の向上を

図る。

期日：令和元年8月2日（金）、3日（土）

会場：文教大学越谷校舎4号館（422R）

参加者：22名

講義・発表内容

A（書文化）コース

※今年度非開講

B（学校教育）コース

講義①学習指導要領概説（小中高）

講義②実技（1）・基本的な用筆法・運筆法

講義③実技（2）・漢字（楷書）

講義④実技（3）・漢字（行書）

講義⑤実技（4）・平仮名・片仮名・漢字仮名交じりの書

講義⑥実技（5）・その他（草書・隸書・篆書・仮名など）

講師：豊口 和士（文教大学）

小・中学校国語科書写、高等学校芸術科書道の指導に必要な知識・技能について、基礎基本となる事項について学びます。技能面では、基本的な用筆法・運筆法から始め、書写および書道の学習領域全般について幅広く確認していきます。また、小中高学習指導要領のポイントを概説します。

書写書道教育夏期講座

(5) (特別企画) ヨーロッパの言語と文化教育夏期講座

—ヨーロッパの言語と文化へのいざない—

対象：ヨーロッパ語の言語と文化に関心のある方。

埼玉県内在住または在勤の方。

目的：ヨーロッパの言語文化についての理解を深める。

期日：令和元年8月2日（金）

会場：文教大学越谷校舎3号館（3307R）

参加者：15名

講義・発表内容

講義①「ドイツ語入門

—ドイツ語圏の言語と文化に触れてみましょう」

山川 智子（文教大学）

ドイツ語圏のことばと文化、および日本との関係について、社会情勢、歴史、環境、音楽、食文化等の話題を交えつつ、知識を深めていきましょう。

ドイツ語のアルファベットの読み方や発音のルールを学び、挨拶表現や歌の歌詞なども参考にしながら、日常生活でよく使う表現を使って参加者同士で交流したいと思います。

講義②「イタリアモーレ：ITALIAMORE」

ダニエーラ スタービレ（文教大学・兼）

この講義は「イタリアモーレ」ITALIA+AMORE（愛）、イタリアという国、イタリア語について興味を持っている、そしてイタリア語についてはじめて学ぶ学生を対象とした講義です。イタリア語という言語はどのような特徴があるかを理解した上で、イタリア語のアルファベット、発音の基礎的なトレーニング

グ、自己紹介などを学びます。イタリアについての愛Amoreが深まる講義です！気になる方は、是非授業に参加してみてください。

講義③「スペイン語版：トリビアの泉」

志村 恵子（文教大学・兼）

7年前までテレビで放送されていた「トリビアの泉」風に、思わず「へえ?!」と言いたくなるような単語の豆知識をお贈りします。スペイン語が分からなくても大丈夫。よく知っている英単語を例に挙げて、スペイン語も絡めて幾つもの単語の語源を説明していきます。例えばフィリップって馬好きなの?とか、筋肉の中にはネズミがいるの?とか。20へえ頂けるように頑張ります。

ヨーロッパの言語と文化教育夏期講座

②異文化体験講演会

期 日：令和2年1月29日（水）16：20～17：50

講演者：岡戸 真幸 氏

（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター／
上智大学研究機構イスラーム研究センター）

演 題：「パンと塩を共に食べた仲：エジプトにおける人づきあ

いから考える」

概要：日本から遠いアフリカ大陸にあるエジプトについて、ピラミッドなどの世界遺産やイスラム教などを思い浮かべる一方で、現地でどのように人々が生活し、何を考えているかを知る機会は少ないかもしれません。私は、人類学を専門とし、長年、同国の港湾都市アレクサンドリアで農村から都市への出稼ぎ労働者や地方出身者が作る相互扶助団体を調査してきました。「パンと塩を共に食べた仲」とは、現地の人との交流が増すなかで、親密さを表す言葉としてよく耳にしました。今回の講演会では、エジプト人の家族や近所づきあいから、助け合いなどを含めた人同士のつながりのあり方について、現地での体験をお話します。

第1回 異文化体験講演会

研修部より

グラハム 児夢

2019年度の殺人的猛暑の中、文教大学言語文化研究所主催の夏期講座が無事に終了しました。「美しいハーモニー」を意味する「令和」の最初の夏期講座という前兆のよいムードに満ちている新たなスタートでした。

例年通り、午前10時30分から16時15分まで5部門それぞれの3種類の講座に熱心な参加者が出席しました。内容は次のとおりでした。

英語教育の午前中の講演者は研修部主任（著者）グラハム児夢准教授でした。デジタル化された情報が氾濫する時代の中で、教材としての「美術」とその使い道の歴史に触れながら、現代アメリカの風潮におけるポリティカル・コレクトネスが生んだ所謂文化の盗用について英語で語りました。

二番目の講演者は文教大学英米語英米文学科卒の奈良美帆さんでした。奈良さんは現在テキサス州のヒューストン大学の大学院に在籍しており、ビジネスを学びながら陸上競技のトレーニングにも力を入れています。奈良さんは熱狂的に個性豊かなテキサス州という国の中の「国」を紹介しながら、アメリカのスポーツ教育や著名選手カール・ルイスという恩師についても話して下さいました。

最後に獨協大学の浅岡千利世教授が教員のスキルを磨くため、共同学習を通すself-developmentのノウハウを提唱し、参加者から目覚ましいレスポンスを招きました。

今回の日本教育のテーマは「東アジア最新の日本語教育情報」でした。本学の荒井智子准教授は今日の台湾での日本語人気を取り上げました。十人に一人は日本語を勉強しているという驚くほどのブームにおける目的の多様性を分析しました。

次の講演者は韓国誠信女子大学の安平鎬教授で、日韓両国の交流における日本語教育の重要性を強調しながら、日本語と韓国語それぞれの文法範疇的な意味としての時間性や他動性の言語比較をしました。

最後に中国華南理工大学の金華教授は中国での日本語教育の歴史を背

景に、大学のレベルで見られる最新のトレンドを探りました。

中国語教育も新しい視点にフォーカスをあてました。

本学の館野由香理先生の講義は日本人学習者がよく戸惑う現代中国語漢字の発音とそれに相当する日本漢字音の対応関係についてでした。

今の高校生はどういう方法で中国語を学んでいるのかという疑問に、埼玉県立伊奈学園総合高等学校の星野勝樹先生が答えました。三回目の講演会で、今回の講義に簡単な挨拶や雑談のテクニックを紹介しながら、声調の見直しのための発音クリニックを設けました。

三番目に城西国際大学／中国東北大学の王岩教授が誤訳の怖いテーマを取り上げました。「怖い」と言われても、文化の違いがよく見えてくる現象にもなり、豊富な実例を興味深く解説しました。

特別企画としてのヨーロッパ言語の教育講座は「文化へのいざない」をテーマにしました。

最初に本学の外国語学科の山川智子准教授がドイツ語圏の多面的なプロフィールを紹介しました。挨拶表現や楽しい歌もドイツ語入門レッスンに取り入れました。

今回の夏期講座でイタリア語が脚光を浴びるのは初めてです。本学の非常勤講師ダニエーラ・スタービレ先生がITALIA（イタリア）＋AMORE（愛）を合わせたITALIAMOREという絶妙な組み合わせをテーマにし、イタリア語の発音の基礎と簡単な自己紹介を参加者に学んでもらいました。

最後に本学の非常勤講師志村恵子先生が雑学という「無駄の知識」の楽しさを踏まえて、スペイン語と古馴染みの英単語の共通祖先を説明し、西洋言語それぞれの解け合いがよく解りました。

書写書道教育は、今年度はBコースのみの開催となりました。

Bコースの担当の先生豊口和士教授は草書、隸書、篆書、仮名などに関わる実技を概説し、小・中学校国語科書写、高等学校芸術科書道を教えるための不可欠な知識を強調しました。

研修部の新年イベントは異文化体験講演会です。令和元年度の講演者は上智大学の岡戸真幸先生でした。演題は「パンと塩を共に食べた仲：エジプトにおける人づきあいから考える」というイスラム教圏の珍しいトピックでした。ピラミッドのイメージを超えて、人類学者の展望からエジプト人の国民性が概説され、エジプト人なりの人助け合いの仕組みが興味津々に繰り広げられました。

出席者数は下記のとおり：

第34回	英語教育夏期講座	27名（定員 80名）
第18回	日本語教育夏期講座	27名（定員 30名）
第11回	中国語教育夏期講座	24名（定員 20名）
第25回	書写書道教育夏期講座	22名（定員 30名）
特別企画	ヨーロッパの言語と文化教育夏期講座	15名（定員 20名）
	異文化体験講演会	37名

夏期講座のタイミングは多くの参加希望者にとって、都合が悪そうに見えても、リピーターは元気よくいらして下さる。それにしても激減傾向にあるのは気になります。英語教育夏期講座の参加者を増やすための作戦は来年度も課題となっております。